

註

- 1、「仏意」は「往生大要鈔」では二尊となっている。
- 2、関心ということについては、さらに四種法語表に見られる如く、信機信法の外に別行別解にもあったことが注目される。
- 3、「三心義」に就人立信に関して、二門判をあげている。
人につきて信をたつといふは、出離生死のみちおほしといへども、大きにわかちて二あり。一には聖道門、二には浄土門なり。(昭法全、四五五頁)

4、「三部經大意」では信機信本願の文があげてあり、とくに罪惡の凡夫が救われることについて、仏願不思議について長々と述べている。これは他の法語には見えないものである。そこには『觀經疏』廻向發願心積、法事讚、禮讚などからの引文があげてあり、特徴としては、名号万徳所歸說（三字積）、釈迦出世の本意（悲華經からのものと思える記述）、他宗の教義についても触れ、（他宗の教義を仏說として本願を仏說としない理由はないこと）最後に「信心を發して過度すべし」と信ずることの重要性を指摘して結んでい

むすび

一、深心とは基本的には深く信ずる心である。

二、その信ずる対象は大別して二つある。

イ、機、即ち煩惱罪惡の凡夫としての実存的自己

ロ、法、即ち仏法、『觀經疏』では阿弥陀仏（本願）、釈迦、諸仏の三仏である。その中心は阿弥陀仏の本願である。

三、信機は信法の前提である。法の眞実性絶対性を信ずる為にはまず自己の凡夫性（罪惡性煩惱性）を認識しなければならぬ。この実存的自己認識なくして法の眞意を理解することはできない。

法は余りにも偉大なものであるため煩惱罪惡の凡夫にはとても近よりがたいものである。そのため信法のみでは凡夫の成仏は不可能であると思う人も多かるう。しかしこのような考えは間違いである。むしろこのような凡夫の救済成仏を可能にするのがこの法である。故に自己の凡夫性を自覚した上で、尚そのような自己を救う偉大な

法を信ずることが重要である。

四、三仏勸証、信法の中心は本願である。三仏の関係はこの本願を中心に展開している。即ち阿弥陀仏は本願により一切衆生を救わんと誓ひ、釈迦はこの弥陀の本願を説き、諸仏はこの釈迦の所説の間違ひないことを証誠しているのである。

五、異学異見とは聖道門である。『觀經疏』に説かれる異学異見の人とは聖道門の人である。これは『觀經疏』には明白に見えぬ法然の解釈である。これに関連して明恵は法然を批判している。

六、二門判は善導にも見える。善導の教判が二蔵二教判であることは『觀經疏』に見えるが、法然は異学異見を聖道門といい、それにまどわされぬこと（浄土門）を説く中に、善導の上にも聖道浄土の二門判があることを示唆している。『選択集』（第八章）「觀經積」（一二七頁）には「善導の意またこの二門を出ざればなり」とある。

七、他宗觀、「往生大要鈔」には「汝が引くところの經論を信ぜざるには非ず、皆悉く仰信ずといへども、更に汝が破をうけず、そのゆへは汝が引くところの經論と、我が信ずるところの經論と、すでに各別の法門なり」（昭法全、六三頁）と示している。（「要義問答」昭法全、六二二頁参照）自他各々その所依の經論が異なる、故にそこには自他の区別が考えられる。だから汝の教のみを真とし我が教を邪とすることは誤りである。法然は他宗の經論を尊重すると同時に、自己の信ずるところを他と区別して明白に示している。

れてはならないとしている。その理由は阿弥陀仏は本願を発して「若しわれ仏に成りたらんに、十方の衆生わが国に生れんと願いて、名号を唱る事、下十声一声に至らんに、わが願力に乗じて、もし生まれずんば正覚を取らじ」と誓われ、釈迦はこの世に出で衆生のため本願を説き、六方の諸仏は釈迦の弥陀本願を讃め、念仏による決定往生を説いているからである。またこのように一切諸仏は一仏も残らず同心に、一切凡夫の念仏往生を、あるいは願を立て、あるいはそれを説き、あるいはそれを証しているのであるから、いかなる仏が来て難しても、それに決してまどわされてはならない。仏にして然りであるから声聞縁覚、さらにいかなる凡夫の難にもまどわされず、疑う心のないのが深心である。ここでは三仏共に凡夫の念仏往生の決定なることを示している。それ故に上は仏、下は凡夫にいたるまで、いかなる人の批判にもまどわされない決定の信を確立することを示している。「浄土宗略抄」でも同様のことが明されている。「往生大要抄」では「仏」による難の前に、『観経疏』の撰論家に対する部分（J）があげてあり、そして「汝が引く経論を信ぜざるにはあらず。みな悉く信ずといえども、さらに汝が破をばうけず」として汝と自分は所依の経論が異なるとして、「観経弥陀経等を説き給うこと、時も別、所も別、対機も別、利益も別なり」と、相互の異りをあげている。そして相手がいかに批難しようとも自分は自分の所依の経論によって往生の信心を益々増長し成就するものであるとしている。続いて地前の菩薩羅漢辟支仏等から化仏報仏にいたるまでいかなる人にもまどわされず念仏往生の信を確立するこ

とを示している。そしてその根拠として先にあげた「御消息」等にある三仏共に凡夫の念仏往生の決定なることを示すところをあげている。

4、四語録以外のもの

1、『選択集』では生死の家と涅槃の城をあげ二種の信心による決定往生をすすめている。

深心とは謂く深く信ずる心也。まさに知るべし、生死の家には疑をもつて所止となし。涅槃の城には信を以て能入となす。故に今二種の信心を建立して、九品の往生を決定する也。

2、「七箇条の起請文」では、深心具足について要約し、

詮するところ、釈迦の浄土三部経は、ひとへに念仏の一行をとくと心え、弥陀の四十八願は、称名の一行を本願とすと心えて、ぶた心なく念仏するを深心具足といへり」（昭法全、八〇九頁）

と示している、三部経の中心は念仏の一行にあり、称名の一行を本願と心得て二心なく念仏することが深心具足につながるとしている。

3、「十二箇条の問答」では破人について触れ、

人おほくさまたけんとして、これをにくみこれをさへきれとも、これによりて心のはたらかざるを、ふかき信とは申也（昭法全、六七六頁）

と、他人のさまざまに心を乱されないことを深信としている。

3、四語録の内容

右に掲げた表は法然の深心釈で四つの語録に共通に見える部分である。まずここに見える上人の深心釈を考究してみよう。

この釈は二つに大別して考えることができる。初めは機と法に対する確固たる信をもつこと、次は別解別行の人に対して、それらにまどわされないで、確固たる信をもつこと。

初めの信機信法に関してさらに二つの点が指摘される。一つは信法は信本願であること、もう一つは信機は信法の前提であること。まず信法であるが、これは善導の指摘によれば三仏を信ずることである。しかし上人は阿弥陀仏の本願を信ずることを明示している。しかしこのことは他の釈迦・諸仏を否定するものではない。後に見る如く三仏の共通の目的は阿弥陀仏の本願にあったのである。即ち阿弥陀は本願により一切衆生を救い、釈迦は阿弥陀仏の本願を説き、諸仏は釈迦の所説の間違いないことを証誠しているのである。このことから見れば信法の中心が信本願にあるという上人の主張は当然である。次に信機が信法の前提であることについて上人の主張を考察してみよう。信法は大切であるが、信機を説かずしてたゞ信法のみを説くならば、それは一般に妄念も起さぬ罪も造らぬ勝れた人を対象とするものと考えられ、我らが如き罪悪生死、煩惱具足の凡夫はとてその器ではないと思はれるのである。このような疑いをもつものがあるのではないかと善導はひそかに心配されて、二種信心を説かれ、煩惱罪悪の凡夫でも仏の本願を信ずれば、たとい一声の念仏でも決定往生すると示されたのである。このような善導の

心を疑うものは往生不定である。このことをよく／＼心えて、心の善悪をかえりみず、口に南無阿弥陀仏と称し、声につきて決定往生の思いをなすことが大切である。往生は不定と思えば不定である。疑う心を捨てて、決定往生の信をもつことが肝要である。要約すれば深心の心とは念仏申せば仏の本願により往生間違いなしと深く信じて疑わない心である。

次に別解別行の人にまどわされないで決定の信を確立することについて、ここでも二つの特徴が見られる。一つは別解別行の人を聖道門とし、浄土門と区別すること、他は四重の破人に関するもの、前者について「御消息」では異解の人として天台法相等の八宗の学をあげ、異行の人として真言止観等の一切の行者をあげている。「浄土宗略抄」「往生大要抄」にも同様のことが示されている。「選択集」には「一切の別解別行異学異見等と云うは、これ聖道門の解行学見を指す也。その余は即ちこれ浄土門の意なり。文にあり見るべし。明らかに知らぬ。善導の意またこの二門を出でざる也。」(昭法全、三三四頁)とある。これによれば善導も聖道門浄土門の二門判を考えておられたものと法然は理解していたのである。また聖道門を異学異見―群賊悪獸(廻向発願心釈)―としたのに対して明慧は厳しく批難している。(『摧邪輪』巻下、浄全八一―一六六頁)

次に四重の破人について、これは『観経疏』では、撰論学者、地前の菩薩、地上の菩薩、仏となっているが、「御消息」ではいきなり仏をあげ、たとい仏が来て光を放って、煩惱罪悪の凡夫は念仏して往生できるというのは間違っていると難しても、それにまどわさ

十八願を信ず」とは弥陀を信じ、また無量寿経を信ずること、「決定して深く釈迦仏の觀經」というのは、釈迦を信じ觀經を信ずること、「決定して深く阿弥陀經の中」というのは、十方諸仏を信じ阿弥陀經を信ずることであるとしている。次に下の部分に関して「仏の捨てしめ給う」をば雜修雜行を指し、「仏の行ぜしめ給う」ところは專修正行を指す。また「仏の去らしめ給う」とは異學異解雜縁亂動のところを指す。「仏教に隨順す」とは釈迦の教えに隨い、「仏願に隨順す」とは弥陀の願に隨い、「仏意に隨順す」とは二尊の御心にかなりこととしている。そして詮ずるところは雜修を捨てて專修を行ずるのが仏の御心にかなりものである。要点を图示すると次の如くなる。

三 仏 三 經
 阿弥陀仏——無量壽經
 釈 迦——觀 經
 諸 仏——阿弥陀經
 三隨順 (三) 仏
 仏 教——釈 迦
 仏 願——阿弥陀仏
 仏 意——二尊(釈迦・弥陀)

i と j の間

この「大要鈔」には四重の破人の内「撰論家」(『觀經疏』表のJ)に関する文があげてある。ここで注意すべきことは、解行不同の人の經典を一方的に否定するのではなく、それはそれとして尊重はするが、それによって自己の信仰を難破されるものではないとの主張である。自他は所依の經論が異なり、時・所・機・利益が異なるので、他の難破にまどわされず確固たる信仰をもつことが肝要である。

n 以後

ここはさらに信についての追加である。身の毛もよだち、涙がこぼれなければ信がえられたとはいえない、というのは間違いである。これは歡喜隨喜悲喜という。信とは疑に對置する心である。疑を除くことが信である。一たび自分がこれだと信じた後は、他人のいかなる言動にもまどわされないのが信である。その上で歡喜隨喜が發れば結構なことである。確固たる信の持ち主で虚言せぬ人をしかりと信じているとき、そのことを知らぬ人の虚言にまどわされぬ心である。このように三仏の心をしかりと信じて他人の言葉にまどわされぬのが信である。

「大胡の太郎実秀へつかはす御返事」

f の前

善導の勝れたことを示し、善導が弥陀の化身であり、三昧発得の師であることをあげている。これに似たことは『選択集』のその他にも見える。

ずる心が深心である。

二、仏願を信じ念仏申すものは臨終正念に來迎をうる。

ホ、『稱讚淨土經』には臨終來迎をうる事が説かれている。

へ、臨終のみを願って念仏申すのは過、臨終のみを願うのでなく、平常から仏願を信じて念仏申すことが肝要、これが臨終正念につながる。

以上を要約すると、仏願の絶対性を信じて不善にながされることなく、平常より念仏申すことが臨終正念に通ずるものである。

「往生大要鈔」

eとfの間(ここでは仏の本願について語る)

イ、煩惱を断じなければ往生不定だとすれば凡夫の往生は望めない。果して仏は本当に凡夫を救う力があるのだろうか。或はまた凡夫の心の善悪によって仏の本願に叶うか叶わないかを判断すべきであらうか。たゞ仏のみ知るところである。

ロ、続いて「弘願の文」をあげ、善導の如き人にもなれないものが、どうして仏の御心を知ることができるのか。仏の本願を知ろうとしたら、疑ったりすることはゆめゆめすべきではない。

gとhの間

ここはかなり長い部分である。二つに大別して考えることができよう。

イ、仏の本願の深広なること。

①、まず觀經下下品、双卷經、往生禮讚の文をあげて二点があげられている。一つは悪人の救済、二は法滅以後の救済である。前者は觀經下下品等の文により、後者は双卷經、禮讚の文によって指摘されている。この二つの救済の心は仏の本願が広く(悪人の救済をも含む)、遠く(法滅以後も含む)及ぶものであることを示すものである。そして重きをあげて軽きを収め、遠きをあげて近きを収め、後をあげて前を収めている。これまさに本願の大悲深広なることを示すものである。

そこで現在の我々を考えると、末法に入ったとはいえまだ百年にも満たず、悪業重しといえども五逆までは犯してはいない。大悲深広の本願の救いにあずかること決定である。三心具足の念仏をし、一念も疑うべきではない。

②、煩惱罪惡の凡夫の一念往生決定とはいえ、罪を造るのもよし、一念で往生する故多念申す必要なしと思うことはあさましいことである。善導も貪瞋煩惱をまじえず念々相續畢命を期となすといっていることを銘記すべきである。たゞ仏の大悲本願は十悪五逆のものも一念十念のものも一切撰取したまうことを深く信すべきである。この辺を誤解せぬよう心えるべきである。

ロ、信法の私釈

これは『觀經疏』の表のCDEとFの部分に関するものである。まず三仏の信(CDE)についてはこれを三經に配して、三仏三經を信すべきことをあかしている。まず「決定して深く阿彌陀仏の四

<p>n</p> <p>仏なをしかり、いはんや声聞縁覚をや、いかにいはんや凡夫をやと心えつれば、一たひも、この念仏往生の法門をきゝひらきて、信をおこしてんのちは、いかなる人、とかく申すとも、なかくうたかふ心あるへからすところおほへ候へ。これを深心と申候也。</p>	<p>仏なをしかり、いはんや声聞縁覚をや、いかにいはんや、凡夫をやと心えつれば、一度この念仏往生を信してんのち、いかなる人、とかくいひさまたくとも、うたかふ心あるへからすと申す事也。これを深心とは申すなり。</p>	<p>ほとけなをしかり、いはんや地前地上の菩薩をや。いはんや小乗の羅漢をやと心えつれば、まして凡夫のとかく申さんによりて、一念もうたがひおどろく心あるべからずとは申す也。</p>	<p>イハムヤ仏ヲチノノタマハムオヤ。イハムヤ辟支仏等オヤト、ユマユマト釈シタマヒテ候也。イカニイハムヤ、コノコロノ凡夫ノイヒサマタケムオヤ。</p>
<p>全文を掲載</p>	<p>dとe、gとhの間に省略あり</p>	<p>eとf、gとh、iとjの間、n以後に省略あり。</p>	<p>fの前に省略あり。原文の順序は、b・d・j・k・m・n・f・g。</p>

2、四語録の補足

四語録の対照表において、「御消息」の文は全文が掲載されているが、他の三法語にはそれぞれ共通でない部分があり、その部分が掲載されていない。その部分をまず考察することにする。

「浮土宗略抄」

dとeの間

信機信法に関するもの。初めに信機をあかさずして信法(信本願)のみをあかしたならば、それは煩惱を発さず、罪をも造らぬめでたき人のためであって、われらが如き凡夫のためではないと自から往生不定とってしまうのではないかと、この二種の信心をあかしたものである。その心が身にしみて有難く思はれるのである。この内容がc欄にほぼ該当するものであるが、語数も多く表現法も異なる

ものである。(b欄と重複する部分もある)

gとhの間

イ、仏の本願は過を嫌わないからといって不善の振るまいをするのではない。善導は至誠心積に、不善の三業を真実心中に捨て、善の三業を真実心中になすべきことを説いている。それ故、不善を捨てて善へ進むべきである。

ロ、弥陀の本願は善悪を嫌わず、唱名すれば来迎を得ると信じ、また名号の功德はいかなる過をも滅し、十念一念に至るまで必ず往生を得ることができる。この目出度いことに一念の疑いもまたぬ心が深心である。

ハ、また一念でも往生はできるが、上は念仏申す思いをもったときから、下は十声一声に至るまで弥陀の願力によって往生すると信

m	l	k
<p>かくのとき一切の諸仏、一仏ものこらす同心に、一切の凡夫、念仏して決定して往生すべきむねを、あるいは願をたて、あるいはその願をとめ給へるうゑには、いかなる仏の又きたりて、往生すへからずとはの給へきそといふことはりの候そかし。このゆへに仏きたりての給ふともおとろくへからずとは申候也。</p>	<p>かくのとき一切の諸仏、一仏ものこらす同心に、一切の凡夫念仏して、決定して往生すべきむねをすゝめ給へるうゑには、いつれの仏の又往生せずとはの給ふへきそといふことはりをもち、仏きたりての給ふともおとろくへからずとは申す也。</p>	<p>とらしとちかひ給て、その願成就してすてに仏になり給へり。しかるを釈迦ほとけの世界にいて、衆生のために、かの仏の本願をとき給へり。又六方におのゝ恒河沙数の諸仏ましくて、口々舌をのへて、三千世界におほふて、無虚妄の相を現して、釈迦仏の弥陀の本願をほめて、一切衆生をすゝめて、かの仏の名号をとなふれば、さためて往生すとき給へるは、決定してうたかひなき事也。一切衆生みなこの事を信すへしと証誠し給へり。</p>
<p>かくのごとき一切の諸仏の、一仏ものこらず同心に、あるいは願をおこし、あるいはその願をとき、あるいはその説を証して、一切の凡夫念仏して決定往生すべきむねをすゝめ給へるうゑには、いかなるほとけの又きたりて、往生すべからずとはの給ふべきぞといふことはりをもて、ほとけきたりての給ふとも、おどろくべからずとは信ずる也。</p>	<p>かくのごとき一切諸仏一仏ものこらす、同心に一切凡夫念仏して、決定して往生すべきむねをすゝめ給へるうゑには、いつれの仏の又往生せずとはの給ふへきそといふことはりをもち、仏きたりての給ふともおとろくへからずとは申す也。</p>	<p>とき給へり。六方恒沙の諸仏は舌相を三千世界におほふて、虚言せぬ相を現して、釈迦仏の、弥陀の本願をほめて、一切衆生をすゝめて、かのほとけの名号をとなふれば、さためて往生すとの給へるは、決定してうたかひなき事也。一切衆生みなこの事を信すへしと証誠し給へり。</p>
<p>は、この五濁悪世にして悪衆生悪見悪煩惱悪邪无信さかりなる時、弥陀の名号をほめ衆生を勧励して、称念すればかならず往生する事をうとめ給へり。又十方の諸仏は、衆生の釈迦一仏の所説を信ぜざらん事をおそれ、すなはちとも同心同時に おのゝ舌相を出して、あまねく三千世界におほひて、誠実のことばをとき給ふ。なんぢ衆生、みな釈迦の所説所讃所証を信ずべし。一切の凡夫罪福の多少、時節の久近をとはず、たゞよく上みは百年をつくし、下も一日七日十声一声にいたるまで、心をひとつにしてもはら弥陀の名号を念すれば、さだめて往生する事をうといふ事を信ずべし。かならずうたがふことなかれと証誠し給へり。</p>	<p>は、この五濁悪世にして悪衆生悪見悪煩惱悪邪无信さかりなる時、弥陀の名号をほめ衆生を勧励して、称念すればかならず往生する事をうとめ給へり。又十方の諸仏は、衆生の釈迦一仏の所説を信ぜざらん事をおそれ、すなはちとも同心同時に おのゝ舌相を出して、あまねく三千世界におほひて、誠実のことばをとき給ふ。なんぢ衆生、みな釈迦の所説所讃所証を信ずべし。一切の凡夫罪福の多少、時節の久近をとはず、たゞよく上みは百年をつくし、下も一日七日十声一声にいたるまで、心をひとつにしてもはら弥陀の名号を念すれば、さだめて往生する事をうといふ事を信ずべし。かならずうたがふことなかれと証誠し給へり。</p>	<p>は、この五濁悪世にして悪衆生悪見悪煩惱悪邪无信さかりなる時、弥陀の名号をほめ衆生を勧励して、称念すればかならず往生する事をうとめ給へり。又十方の諸仏は、衆生の釈迦一仏の所説を信ぜざらん事をおそれ、すなはちとも同心同時に おのゝ舌相を出して、あまねく三千世界におほひて、誠実のことばをとき給ふ。なんぢ衆生、みな釈迦の所説所讃所証を信ずべし。一切の凡夫罪福の多少、時節の久近をとはず、たゞよく上みは百年をつくし、下も一日七日十声一声にいたるまで、心をひとつにしてもはら弥陀の名号を念すれば、さだめて往生する事をうといふ事を信ずべし。かならずうたがふことなかれと証誠し給へり。</p>
<p>エム人ハ、カナラス往生スヘシトイフコトヲ。マタ釈迦仏コノ娑婆世界ニイテテ、一切衆生ノタメニ、カノ阿弥陀仏ノ本願ヲトキ、念仏往生ヲススメタマヘリ。マタ六方ノ諸仏ハソノ説ヲ証誠シタマヘリ。</p>	<p>エム人ハ、カナラス往生スヘシトイフコトヲ。マタ釈迦仏コノ娑婆世界ニイテテ、一切衆生ノタメニ、カノ阿弥陀仏ノ本願ヲトキ、念仏往生ヲススメタマヘリ。マタ六方ノ諸仏ハソノ説ヲ証誠シタマヘリ。</p>	<p>エム人ハ、カナラス往生スヘシトイフコトヲ。マタ釈迦仏コノ娑婆世界ニイテテ、一切衆生ノタメニ、カノ阿弥陀仏ノ本願ヲトキ、念仏往生ヲススメタマヘリ。マタ六方ノ諸仏ハソノ説ヲ証誠シタマヘリ。</p>

	j	
<p>i</p> <p>あらぬさどりの人にいひやふらるま しき事はりをは、善導こまかに釈し 給ひて候へとも、その文ひろくし て、つぶさにひくにおよはず。</p>	<p>j</p> <p>心をとりにて申さは、たとひ仏きたり てひかりをはなち、したをいたして 煩惱罪惡の凡夫の念仏して、一定往 生すといふ事は、ひか事を信すへか らすとの給とも、それによりて一念 もうたかふ心あるへからず、</p>	<p>そのゆへは、一切の仏はみなおな し心に、衆生をはみちひき給ふ也。 すなはち、まつ阿弥陀如来願をおこ していはく、もしわれ仏になりたら んに、十方の衆生わかくに、むまれ んとねかひて、名号をとなふる事、 下十声一声にいたらんに、わか願力 に乗して、もしむまれずんは正覺を</p>
<p>はいかゝ往生すへき、異功德をつく り、こと仏にもつかへて、ちからを あはせてこそ往生程の大事をはとく へけれ。たゞ阿弥陀仏はかりにて は、かなはしものをなんとうたかひ をなし、いひさまたけん人のあらん にも、けにもと思ひて、一念もうた かふ心なくて、いかなることほりを きくとも、往生決定の心をうしなふ 事なかれと申す也。</p> <p>人にいひやふらるましきことほり を、善導こまやかに釈し給へり。</p>	<p>心をとりにて申さは、たとひ仏まし くて、十方世界にあまねくみち く、光をかゝやかし舌をのへ て、煩惱罪惡の凡夫、念仏して一定 往生すといふ事、ひか事も信すへか らすとの給ふとも、それによりて、 一念もうたかふへからず</p>	<p>そのゆへは、仏はみな同心に衆生を 引導し給に、すなはち阿弥陀仏浄土 をまうけて、願をおこしての給は く、十方衆生、わか國にむまれんと ねかひて、わか名号をとなへんも の、もしむまれずんは正覺をとらしと ちかひ給へるを、釈迦仏この世界に いて、衆生のためにかの仏の願を</p>
<p>つきて信をたて、行につきて信をた つといふこの信をあげたり。はじめ の人につきて信をたつといへる。こ れなり、</p> <p>その文広博にしてつぶさにいだすに あたはず。</p>	<p>たとひ化仏報仏、十方にみちみち て、おのおのひかりをかゞやかし、 したをいだして、十方におほひて、 一切の凡夫念仏して一定往生すとい ふ事ひが事なり。信すべからずとの 給はんに、われこれらの諸仏の所説 をきくとも、一念も疑退の心をおこ して、かのくに、むまるゝ事をえざ らん事をおそれじ。</p>	<p>なにをもてのゆへにとならば、一仏 は一切仏也、大悲等同にしてすこし きの差別なし。同躰の大悲のゆえ に、一仏の所説はすなはちこれ一切 仏の化なり。こゝをもてまづ弥陀如 來、称我名号下至十声、若不生者不 取正覺と願じて、その願成就してす でに仏になり給へり。又釈迦如來</p>
<p>タトヒオホクノ仏、ソラノ中ニミチ ミチテ、ヒカリヲハナチ、御シタラ ノヘテ、ツミヲツクル凡夫、念仏 シテ往生ストイフ事ハヒカコトナ リ、信スヘカラストノタマフトモ、 ソレニヨリテ一念モ、オトロキウタ カフココロアルヘカラス。</p>	<p>ソノユヘハ、阿弥陀仏イマタ仏ニナ リタマハサリシムカシ、モシワレ仏 ニナリタラムニ、ワカ名号ヲトナフ ル事、十声一声マテセムモノ、ワカ クニニムマレスハ、ワレ仏ニナラシ ト、チカヒタマヒタリシ、ソノ願ム ナシカラスシテ、ステニ仏ニナリタ マヘリ。シルヘシ、ソノ名号ヲトナ</p>	<p>ソノユヘハ、阿弥陀仏イマタ仏ニナ リタマハサリシムカシ、モシワレ仏 ニナリタラムニ、ワカ名号ヲトナフ ル事、十声一声マテセムモノ、ワカ クニニムマレスハ、ワレ仏ニナラシ ト、チカヒタマヒタリシ、ソノ願ム ナシカラスシテ、ステニ仏ニナリタ マヘリ。シルヘシ、ソノ名号ヲトナ</p>

	f	g	h
<p>たゞ心のよきわるきをも返り見す。罪のかるきおもきをも沙汰せず、心に往生せんとおもひて、口に南無阿彌陀仏となへば、声につきて決定往生のおもひをなすべし。その決定の心によりて、すなわち往生の業はさたまる也。かく心うれはうたかひもなし。不定とおもへばやかて不定也、一定とおもへば一定する事にて候也。</p>	<p>されは詮しては、ふかく信する心と申候は、南無阿彌陀仏と申せば、その仏のちかひにて、いかなるとかをもきらはす、一定むかへ給ふそと、ふかくたのみて、うたかふ心のすこしもなきを申候けるに候。</p>	<p>又別解別行にやふられされと申候は、ざとりに、行ことならん人の、いはん事について、念仏をもすて、往生をうたかふ事なかれと申候也。ざとることなる人と申は、天台法相等の八宗の学生、これ也。行ことなる人と申すは、真言止観等の一切の行者、これ也。これらはみな聖道門の解行也、浄土門の解行にことなるかゆへに別解別行となつくるなり。</p>	
<p>心の善悪をかへり見す、つみの軽重をも沙汰せず、たゞ口に南無阿彌陀仏と申せば、仏のちかひによりて、かならず往生するそと決定の心をおこすへき也。その決定の心によりて、往生の業はさたまる也。往生は不定におもへば不定也、一定とおもへば一定する事也。</p>	<p>詮してはふかく仏のちかひをたのみて、いかなるところをもきらはす、一定むかへ給ふそと信して、うたかふ心のなきを深心とは申候也。</p>	<p>又別解別行の人にやふられされといは、ざとりに、をこなひことならん人のいはん事につきて、念仏をもすて、往生をもうたかふ心なれといふ事也。ざとることなる人と申すは、天台法相等の八宗の学匠なり。行ことなる人と申すは、真言止観の一切の行者也。これらは聖道門をならひおこなふ也。浄土門の解行にはことなるかゆへに別解別行となつくる也。</p>	<p>又惣しておなしく念仏を申す人なれとも、弥陀の本願をはたのますして、自力をはけみて念仏はかりにて</p>
<p>たゞ心の善悪をかへりみず、罪の軽重をもわきまへず、心に往生せんとおもひて、口に南無阿彌陀仏となへば、こゑについて決定往生のおもひをなすべし。その決定によりてすなはち往生の業はさたまる也。かく心えつればやすき也。往生は不定におもへばやがて不定なり。一定とおもへばやがて一定する事なり。</p>	<p>所詮は深心といは、かのほとけの本願は、いかなる罪人をもすてずたゞ名号となふる事一声までに、決定して往生すとふかくたのみて、すこしうたがひもなきを申す也。</p>	<p>又つぎの文に、別解別行のためにやふられざれといふは、ざとりに、行ことならん人の難じやぶらんにつきて、念仏をもすて往生をもうたかふ事なかれと申す也。ざとることなる人と申すは、天台法相等の諸宗の学生これなり。行ことなる人と申すは、真言止観の一切の行者これなり。これらはみな聖道門の解行也。浄土門の解行にことなるかゆへに別解別行とはなづけたり。</p>	<p>かくのごときの人に、いひやぶらるまじきことよりは、この文のつぎにこまかに釈し給へり。すなはち人に</p>
<p>シカレハタレタレモ、煩惱ノウスク コキオモカヘリミス。罪障ノカロキ オモキオモサタセス、タタクチニテ 南無阿彌陀仏トトナエハコエニツキ テ決定往生ノオモヒヲナスヘシ。決 定心ヲスナワチ深心トナツク。ソノ 信心ヲ具シヌレハ、決定シテ往生ス ルナリ。</p>	<p>詮スルトコロハ、タタトニモカクニ モ、念仏シテ往生ストイフ事ヲウタ カハヌヲ、深心トハナツケテ候ナ リ。</p>		

<p>e</p> <p>この釈の、ことに心にそみていみしくおほへ候也。ま事にかくたに釈し給はさしかは、われらか往生は不定にそおほへましと、あやうくおほへ候て、されはこの義を心えわかぬ人やらん、わか心のわろければ往生はかなはしなんとこそは、申あひて候めれ。そのうたかひの、やかて往生せぬ心にて候けるものを。</p>	<p>d</p> <p>しかるを善導和尚、未来の衆生の、このうたかひをのこさん事をかゝみて、この二種の信心をあけて、われらかことき、いまた煩惱をも断せず、罪をもつくれる凡夫なりとも、ふかく弥陀の本願を信して念仏すれば、一声にいたるまで決定して往生するむねを釈し給へり。</p>	<p>c</p> <p>いまこの本願に十声一声までに往生すといふは、おほるけの人にはあらし、妄念もおこさず、罪もつくりす、めてたき人にてそあるらん。わかこときのともからの、一念十念にてはよもあらしとそおほへまし。</p>
<p>この釈を心えわけぬ人は、みなわか心のわろければ、往生はかなはしなんとこそ申あひたれ。そのうたかひをなすは、やかて往生せぬ心はへ也。このむねを心えて、なかくうたかふ心あるまじき也。</p>	<p>善導はかねてこのうたかひをかゝみて、二つの信心のやうをあけて、われらかこときの煩惱をもおこし、罪をもつくれる凡夫なりとも、ふかく弥陀の本願をあふきて念仏すれば、十声一声にいたるまで、決定して往生するむねを釈し給へり。</p>	
<p>かくだに釈し給はざらましかば、われらが往生は不定にぞおほへまし。あやうくおほゆるにつけても、この釈の、ことに心にそみておほへはんべる也。さればこの義を心えわかぬ人にこそあるめれ。ほとけの本願をばうたがはねども、わが心のわろければ往生はかなはじと申あひたるが、やがて本願をうたがふにて侍る也。</p>	<p>これは善導和尚は、未来の衆生のこのうたがひをおこさん事をかへりみて、この二種の信心をあけて、われらごとき煩惱をも断せず、罪悪をもつくれる凡夫なりとも、ふかく弥陀の本願を信じて念仏すれば、十声一声にいたるまで決定して往生するむねをば釈し給へる也。</p>	<p>あらば、みだりに自身を怯弱して、返りて本願を疑惑しなまし。 まことに此弥陀の本願に、十声一声にいたるまで往生すといふ事は、おほるげの人にてはあらじ。妄念をおこさず、つみをもつくりぬ人の、甚深のさとりをおこし、強盛の心をもちて申したる念仏にてぞあるらん。われらごときのえせものどもの、一念十声にてはよもあらじとこそおほえんもにくからぬ事也。</p>
	<p>サレハ善導ハ、ハルカニ未来ノ行者ノ、コノウタカヒヲノコサム事ヲカカミテ、ウタカヒヲノソキテ、決定心ヲススメカタメニ煩惱ヲ具シテツミヲツクリテ、善根スクナクサトリナカラム凡夫、一声マテノ念仏、決定シテ往生スヘキコトワリヲ、コマカニ釈シテノタマヘルナリ。</p>	

ワカ信スルトコロハ、ワカ有縁ノ教、イマヒクトコロノ経論ハ、菩薩人天等ニ通シテトケリ。ユノ観経等ノ三部ハ、濁悪不善ノ凡夫ノタメニトキタマフ。シカレハカノ経ヲトキタマフ時ニハ、対機モ別ニ、所モ別ニ、利益モ別ナリキ、イマキミカウタカヒヲキクニ、イヨイヨ信心ヲ増長ス。

(昭法全、六二二頁)

KLM

さらに「要義問答」ではKLMの部分の一つにまとめ要約した言葉が示されている。(Mに関連して「大胡の太郎実秀につかはす御

三、法然の深心釈

1、四語録対照表

御消息(昭法全、五八〇頁)	浄土宗略抄(昭法全、五九六頁)	往生大要抄(昭法全、五八頁)	大胡太郎実秀へつかはす御返事(昭法全、五一六頁)
<p>a</p> <p>この釈の心は、はじめにはわか身の程を信じ、のちには仏の願を信する也。たゞしのちの信を決定せんかために、はじめの信心をはあくる也。</p>	<p>この釈の心は、はじめにわか身の程を信して、のちにはほとけのちかひを信する也。のちの信心のためにはじめの信をはあくる也。</p>	<p>はじめにはわが身のほどを信じ、のちにはほとけの願を信する也。たゞしのちの信心を決定せしめんがために、はじめの信心をばあくる也。</p>	
<p>b</p> <p>そのゆへは、もしはじめの信心をあけすしてのちの信心を出したらましかは、もろくの往生をねかはん人、たとひ本願の名号をはとなふとも、身つから心に貪欲瞋恚の煩惱をもおこし、身に十悪破戒等の罪悪をもつくりたる事あらは、みなりに自ら身をひかめて、返て本願をうたかひ候ひなまし。</p>	<p>そのゆへは往生をねかはんもろくの人の、弥陀の本願の念仏を申しながら、わか身貪欲瞋恚の煩惱をもおこし、十悪破戒の罪悪をもつくるに於て、みなりにわか身をかるしめて、かえりてほとけの本願をうたかふ。</p>	<p>そのゆへは、もしはじめのわが身を信する様をあげずして、たゞちのちのほとけのちかひばかりを信ずべきむねをいだしたらましかば、もろくの往生をねがはん人、雑行を修して本願をたのまざらんをばしばらくおく。まさしく弥陀の本願の念仏を修しながらも、なを心にもし貪欲瞋恚の煩惱をもおこし、身におのづから十悪破戒等の罪業をもおかす事</p>	<p>シカルニモロモロノ往生ヲネカフ人モ、本願ノ名号オハタモチナカラ、ナホ内ニ妄念ノオコルニモオソレ、外ニ余善ノスクナキニヨリテ、ヒトヘニワカミヲカロ(シ)メテ、往生ヲ不定ニオモフハ、ステニ仏ノ本願ヲウタカフナリ。</p>

返事」があるがこれは別表を参照。）

モシハ羅漢辟支仏初地十地ノ菩薩、十方ニミチミチ、化仏報仏ヒカリヲカカヤカシ、虚空ニミシタヲハキテ、ムマレストノタマハハ、マタコタエテイフヘシ、一仏ノ説ハ一切ノ仏説ニオナシ、釈迦如来ノトキタマフ教ヲアラタメハ、制止シタマフトコロノ殺生十悪等ノ罪ヲアラタメテ、マタオカスヘカラムヤ。サキノ仏ソラコトシタマハハ、ノチノ仏モマタソラ事シタマフヘシ。オナシコトナラハ、タタ信シソメタル法オハ、アラタメシトイヒテ、ナカク退スル事ナカレ、カルカユヘニ深心ナリ。(昭法全、六二二頁)

いて、

わが身は罪悪生死の凡夫也と信し、弥陀如来は本願をもて、かならず衆生を引接し給ふと信してうたかはず、念仏せん物むまれずは正覚をとらしとちかひて、すてに正覚をなり給へは、称念のものかならず往生すと信すれば、自然に深心をは具する也。

(昭法全、六九二頁)

と示している。ここでも「凡夫也と信し」までが信機で以下が信法であると見ることができよう。ここでは本願念仏にて往生間違いないと信ずることにより自然に深心が具足されることが強調されている。また「十二箇条の間答」には次の如く示されている。

次に深心といふは仏の本願を信する心也。われは悪業煩惱の身なれども、ほとけの願力にて、かならず往生するなりといふ道理をききて、ふかく信して、つゆちりはかりもうたかはぬ心也。

(昭法全、六七六頁)

ここでは深心とは本願を信する心としている。これは他に見られない発言である。信機よりも信法就中信本願の重要なことが如実に表明されている。しかしそれは信機を無視したものではないことが次の箇所に示されている。「われは悪業煩惱の身」というのがそれである。後に触れる如く信機と信法の関係は信法の前提として信機があるのであって、究極的には信法が重要な意味をもっている。この法語はこのことを端的に表明したものと考えられる。また「念仏大意」では、仏の本願を信すれば罪悪生死の凡夫も仏の本願の不思議によって八十億劫の罪が滅せられ臨終来迎にあづかることができる

と示している。

深心トイフハ、弥陀ノ本願ヲフカク信シテ、ワカミハ無始ヨリユノカタ罪悪生死ノ凡夫、一度トシテ生死ヲマヌカルヘキミチナキヲ、弥陀ノ本願不可思議ナルニヨリテ、カノ名号ヲ一向ニ称念シテ、ウタカヒヲナスココロナケレハ、一念ノアヒタニ、八十億劫ノ生死ノツミヲ滅シテ、最後臨終ノ時、カナラス弥陀ノ来迎ニアツカル也。

(昭法全、四〇九頁)

Hに関連して「浄土宗略抄」には多少言葉づかいが異なるが内容には変りないものが示されている。

深心といは、決定して心をたて、仏の教に順して修行して、なかくうたかひをのそきて、一切の別解別行異学異見異執のために、退失傾動せられされといへり。

(昭法全、五九四頁)

Iに関連して「要義問答」には、とくに「問うて曰く」とはなが、内容的にはそれに対応するものが次の如く示されている。

モシ一切ノ智者百千万人キタリテ、経論ノ証ヲヒキテ、一切ノ凡夫念仏シテ往生スル事ヲエストイハムニ、一念ノ疑退ノココロヲオコスヘカラス。

(昭法全、六二二頁)

J即ち撰論家等の入天菩薩に関連して同じく「要義問答」には自他各々有縁の経論によることが指摘されている。

タタコタエテイフヘシ、ナムチカヒクトコロノ経論ヲ、信セサルニハアラス、ナムチカ信スルトコロノ経論ハ、ナムチカ有縁ノ教、

〔浄土宗略抄〕昭法全、五九四頁)

一には、決定してわか身は、これ煩惱を具せる罪惡生死の凡夫也、善根はすくなくして、曠劫よりこのかた、つねに三界に流転して出離の縁なしと信すへし。

〔御消息〕昭法全、五七九頁)

この両者はほぼ同じである。その内容は疏と礼讃の内容を一つにしたものである。「三心義」には

一にはわれはこれ罪惡不善の身、無始よりこのかた六道に輪廻して、往生の縁なしと信じ、(昭法全、四五五頁)

とあり、他の法語とは異った表現が用いられている。「十七条御法語」では漢文体。昭法全、四七〇頁)

C、信本願

二には、ふかくかの阿弥陀仏、四十八願をもて衆生を摂受し給ふ。すなわち名号をとらふる事、下十声にいたるまで、かのほとけの願力に乗して、さためて往生を得と信して、乃至一念もうたかふ心なきかゆへに深心となつく。(浄土宗略抄)昭法全、五九四頁)

二には、かの阿弥陀仏四十八願をもて衆生を摂し給ふ。すなわち名号を称する事、下十声一声にいたるまで、かの願力に乗して、さためて往生する事をうと信して、乃至一念もうたかふ心なきかゆへに深心となつく。

〔御消息〕昭法全、五七九頁)

両者ほぼ同じで、ここにも疏と礼讃の両方の内容が一つになって表

現されている。「三心義」には

二には罪人なりといへども、ほとけの願力をもて強縁として、かならず往生をえん事うたがひなくうらおもひなしと信ず。

(昭法全、四五五頁)

とあり、罪人としての認識の上で、さらに仏(阿弥陀仏)の本願を信じて疑わぬことを示している。「十七条御法語」では漢文体。昭法全、四七〇頁)

この他ABCと区別できないこともないがどちらかという一つにまとめて深心を説いているものがある。「大胡の太郎実秀へつかはす御返事」では、まず「ニニハ深心トハ、スナワチフカク信スルココロナリ」とし、つづいて、

ナニ事ヲフカク信スルソトイフニ、モロモロノ煩惱ヲ具足シテ、オホクノツミヲツクリテ、余ノ善根ナカラム凡夫、阿弥陀仏ノ大悲ノ願ヲアフキテ、ソノホトケノ名号ヲトナエテ、モシハ百年ニテモ、モシハ四五年ニテモ、モシハ二十年乃至一二年、スヘテオモヒハシメタラムヨリ、臨終ノ時ニイタルマテ退セサラム、モシハ七日一日十声一声ニテモ、オホクモスクナクモ、称名念仏ノ人ハ決定シテ往生スト信シテ、乃至一念モウタカフ事ナキヲ深心ト也。

(昭法全、五一六頁)

と示している。これも「凡夫」までを信機、以下を信法と見ることが出来る。そしてそこには疏と礼讃の内容が一つになって表明されているといえる。「念仏往生義」では「深心は信心也」とし、つづ

惱悪邪無信盛時^ニ指讚^{シテ} 弥陀名号^ヲ 勸励^{シテ} 衆生称念^{スレハ} 必得^ト 往生^ヲ 即其証^也。又十方^ノ 仏等恐^ミ
 畏^レ 衆生不^レ 信^ニ 釈迦一仏^ノ 所説^ヲ 即共同心同時^ニ 各出^{シテ} 舌相^ヲ 徧覆^テ 三千世界^ニ 説^ク 誠実言^ニ 汝等衆
 生皆^レ 信^ニ 是^レ 釈迦所説^ノ 所説^ヲ 証^ス 二切^ニ 凡夫不^レ 問^ニ 罪福多少^ノ 時節^ヲ 久近^ヲ 但能^レ 上^ル 尽^ス 三百年^ニ 下^ル 至^ス 一
 日七日^ニ 一心專念^{シテ} 弥陀名号^ヲ 定^テ 得^ト 往生^ス 必無疑^也 是故^ニ 一仏^ノ 所説^ヲ 即一切^ノ 仏同証^ス 誠^ニ 其事^也。

二、疏からの引用

法然の『観経疏』からの引用状況を見ると、AとCの部分が十一
 法語、Bが十、Hが四、Jが三、DEFIMが二、GKLが一とな
 っている。またKLMの部分が一括して示されているものが二法語
 ある。これらによれば法然の関心の中心は最初⁽²⁾のABCにあったこ
 とが判る。即ち深心は深信の心であるという基本的定義、及び信機、
 信法である。特に注意されることは信法に関するものである。疏で
 は信法は阿弥陀仏、釈迦、諸仏の三仏に配当されているが、法然の
 法語ではその中特に阿弥陀仏の本願が他に比べてより多く示されて
 いるのである。これは上人の心の中に信法の中心が阿弥陀仏の本願
 にあったことを示すものと思はれる。或はまたこれは『往生礼讃』
 が阿弥陀仏の本願のみをあげていることによるものであるか。事
 実『礼讃』所説の文の影響は次に見る如く信機信法の発言の中に見
 られる。ABC順に表現を考察してみよう。表中○印は『観経疏』
 の文と同じ、△印はそうでないものである。よってここでは△印の
 ものについて見てみよう。

A、深心の本質について

「要義問答」には「深心トイフハフカキ信ナリ」とあって「深く
 信ずる心」とはしない。「十二箇条の問答」にはこのAの部分はない。
 「念仏往生義」には「深心というは信心也」とあって「深」の字は
 ない。「七ヶ条の起請文」には「深心といふは深く念仏を信ずる心
 なり」とあり、それは「余行」をまじえず念仏に徹することである
 としている。ここでは信ずる対象を機・法とせず念仏そのものとし
 ており、他と異なるものである。「三心料簡および御法語」には
 「无^レ 疑者深信也」として疑の否定としての深信を表わしている。
 「御消息」では元亨版、寛永版にはこの部分がないが、知恩院本四
 十八巻伝及び正徳版には見える。

B、信機

「浄土宗略抄」及び「御消息」には次の如くある。
 一には決定して、わが身はこれ煩惱を具足せる罪悪生死の凡夫也。
 善根薄少にして、曠劫よりこのかた、つねに三界に流転して、出
 離の縁なしと、ふかく信すへし。

M	L	K	J
<p>又置_レ此事_一行者_レ當_レ知_レ縱使_レ化_レ仏報_レ仏若_一若_レ多_レ乃至_レ徧_レ滿_レ十方_一各_レ各_レ輝_レ光_レ吐_レ舌_レ徧_レ覆_レ十方_一一 一_レ說_レ言_レ下_レ釈_レ迎_レ所_レ說_レ相_レ讚_レ勸_レ發_レ一切_レ凡_レ夫_レ專_レ心_レ念_レ仏_レ及_レ修_レ余_レ善_レ廻_レ願_レ得_レ生_レ彼_レ淨_レ土_一者_レ此_レ是 虛_レ妄_レ定_レ無_レ中_レ此_レ事_一也_レ我_レ雖_レ聞_レ此_レ等_レ諸_レ仏_レ所_レ說_レ畢_レ竟_レ不_レ下_レ起_レ二_レ念_レ疑_レ退_レ之_レ心_レ畏_レ不_レ得_レ生_レ彼_レ仏 國_一也_レ何_レ以_レ故_レ一_レ仏_一一切_レ仏_レ所_レ有_レ知_レ見_レ解_レ行_レ証_レ悟_レ果_レ位_レ大_レ悲_レ等_レ同_一無_レ少_レ差_レ別_一是_レ故_レ一_レ仏_一所_レ制_レ即 一_レ切_レ仏_レ同_レ制_一如_レ下_レ似_レ前_レ仏_レ制_レ斷_レ殺_レ生_レ十_レ惡_レ等_レ罪_レ畢_レ竟_レ不_レ犯_レ不_レ行_レ者_レ即_レ名_レ中_レ十_レ善_レ十_レ行_レ隨_レ順_レ六_レ度_レ之_レ義_一 若_レ有_レ二_レ後_レ仏_レ出_レ世_一豈_レ可_レ改_レ前_レ十_レ善_レ令_レ行_レ十_レ惡_レ也_一以_レ此_レ道_レ理_レ推_レ驗_レ明_レ知_レ諸_レ仏_レ言_レ行_レ不_レ相 違_レ失_レ縱_レ令_レ釈_レ迎_レ指_レ勸_レ一切_レ凡_レ夫_レ一_レ身_レ專_レ念_レ專_レ修_レ捨_レ命_レ已_レ後_レ定_レ生_レ彼_レ國_一者_レ即_レ十_レ方_レ諸 仏_レ悉_レ皆_レ同_レ讚_レ同_レ証_一何_レ以_レ故_レ同_レ體_レ大_レ悲_一故_レ一_レ仏_一所_レ化_レ即_レ是_レ一_レ切_レ仏_レ化_レ即_レ是_レ一_レ仏_一所_レ化 即_レ彌_レ陀_レ經_レ中_レ說_レ釈_レ迎_レ讚_レ歎_レ極_レ樂_レ種_レ種_レ莊_レ嚴_レ又_レ勸_レ一切_レ凡_レ夫_レ一_レ日_レ七_レ日_レ一_レ心_レ專_レ念_レ彌_レ陀_レ名_レ号_レ定_レ得_レ中 往_レ生_一也_一次_レ下_レ文_レ云_レ十_レ方_レ各_レ有_レ恒_レ河_レ沙_レ等_レ諸_レ仏_レ同_レ讚_一釈_レ迎_レ能_レ於_レ五_レ濁_レ惡_レ時_レ惡_レ世_レ界_レ惡_レ衆_レ生_レ惡_レ見_レ惡_レ煩</p>	<p>又行者善聽縱使初地已上十地已來若一若多乃至徧滿十方異口同音皆云下釈迎仏指讚彌陀 毀_レ三_レ界_レ六_レ道_レ勸_レ勵_レ衆_レ生_レ專_レ心_レ念_レ仏_レ及_レ修_レ余_レ善_レ畢_レ此_レ一_レ身_レ後_レ必_レ定_レ生_レ彼_レ國_一者_レ此_レ必_レ虛 妄_レ不_レ可_レ依_レ信_レ也_一我_レ雖_レ聞_レ此_レ等_レ所_レ說_レ亦_レ不_レ生_レ二_レ念_レ疑_レ心_レ唯_レ增_レ長_レ成_レ就_レ我_レ決_レ定_レ上_レ上_レ信_レ心_レ何 以_レ故_レ乃_レ由_レ二_レ仏_レ語_レ真_レ實_レ決_レ了_レ義_一故_レ仏_レ是_レ實_レ知_レ實_レ解_レ實_レ見_レ實_レ証_レ非_レ是_レ疑_レ惑_レ心_レ中_レ語_レ故_レ又_レ不_レ為_レ一切_レ善 薩_レ異_レ見_レ異_レ解_レ之_レ所_レ破_レ壞_レ若_レ實_レ是_レ善_レ薩_一者_レ衆_レ不_レ違_レ二_レ仏_レ教_一也_一</p>	<p>又行者更向說言仁者善聽我今為汝更說決定信相、縱使地前菩薩羅漢辟支等若一若多乃至 徧_レ滿_レ十_レ方_レ皆_レ引_レ經_レ論_レ証_レ言_レ不_レ生_レ者_レ我_レ亦_レ未_レ起_レ二_レ念_レ疑_レ心_レ唯_レ增_レ長_レ成_レ就_レ我_レ清_レ淨_レ信_レ心_レ何_レ以 故_レ由_レ二_レ仏_レ語_レ決_レ定_レ成_レ就_レ了_レ義_一不_レ為_レ二_レ切_レ所_レ破_レ壞_レ故_一</p>	<p>機_レ別_レ利_レ益_レ別_一又_レ說_レ彼_レ經_レ時_レ即_レ非_レ下_レ說_レ觀_レ經_レ彌_レ陀_レ經_レ等_レ時_一然_レ仏_レ說_レ教_レ備_レ機_レ時_レ亦_レ不_レ同_レ彼_レ即_レ通_レ說_レ 入_レ天_レ善_レ薩_レ之_レ解_レ行_一今_レ說_レ觀_レ經_レ定_レ散_レ二_レ善_レ唯_レ為_レ三_レ章_レ提_レ及_レ仏_レ滅_レ後_レ五_レ濁_レ五_レ苦_レ等_レ一_レ切_レ凡_レ夫_レ証_レ言_レ得_レ生_レ 為_レ二_レ此_レ因_レ緣_一我_レ今_レ一_レ心_レ依_レ此_レ二_レ仏_レ教_レ決_レ定_レ奉_レ行_レ縱_レ使_レ汝_レ等_レ百_レ千_レ萬_レ億_レ濟_レ不_レ生_レ者_レ唯_レ增_レ長_レ成_レ就_レ我_レ往 生_レ信_レ心_一也_一</p>
○	○	○	○
	△		△
△			
	△		△

C	D	E	F	G	H	I
<p>二者決定深信彼阿弥陀仏四十八願 授受衆生無懷疑慮乘彼願力定得往生</p>	<p>又決定深信釈迦仏説此觀經三福九品定散二善証讚彼仏依正二報使人欣慕</p>	<p>又決定深信弥陀經中十方恒沙諸仏証勸一切凡夫決定得生</p>	<p>又深信者仰願一切行者等一心唯信仏語不願身命決定依行仏遺捨者即捨仏遺行者即行仏遺去処即去是名隨順仏教隨順仏意是名隨順仏願是名真仏弟子</p> <p>又一切行者但能依此經深信行者必不誤衆生也何以故仏是滿足大悲一人故実語故除仏已還智行未滿在其學地由有正習二障未除果願未円此等凡聖縱使測量諸仏教意未能決了雖有平章要須請仏証為定也若称仏意即印可言如是如是若不可仏意者即言汝等所説是義不如是不印者即同無記無利無益之語仏印可者則隨順仏之正教若仏所有言説即是正教正義正行正解正業正智若多若少衆不下問菩薩人天等定其是非也若仏所説即是教菩薩等説尽名不了教也應知是故今時仰勸一切有縁往生人等唯可深信仏語專注奉行不可下信用菩薩等不相應教以為疑礙抱惑自迷廢中失往生之大益也</p>	<p>又深信深信者決定建立自心順教修行永除疑錯不為一切別解別行異學異見異執之所退失傾動也</p>	<p>問曰凡夫智淺惑障処深若逢下解行不同人多引經論來相妨難証云中一切罪障凡夫不得往生者云何對治彼難成成就信心決定直進不生怯退也</p>	<p>答曰若有入多引經論証云不生者行者即報云仁者雖下將經論來証道不生如我意者決定不受汝破何以故然我亦不生信彼諸經論尽皆仰信然仏説彼經時処別特別對</p>
<p>○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>	<p>○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>	<p>○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>	<p>○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>	<p>○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>	<p>○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>	<p>○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>

B、信機、現実の自己の罪惡生死の凡夫としての認識。
 C、信法、CDEは仏の法への絶対的帰依を示すものである。Cは阿弥陀仏の本願への信。

D、釈迦への信。

E、十方諸仏への信。

F、三經三仏への総意。眞の仏弟子はこの三經三仏を信ずるものであって、仏の捨てしめ、行ぜしめ、去らしめ給ふものを行者は捨て、行じ、去るべきこと。仏教(釈迦) 仏意(諸仏) 仏願(阿弥陀仏)に随順すること。

G、仏の説を信じ、菩薩人天の説を信すべきでないこと。仏の説は了教であり、菩薩等の説は不了教である。

H、深心 深信とは別解別行異学異見異執のために退失傾動(まどわ)されないこと。

I、以下問答をあげ、異学異見にまどわれないで信仰を確立す

ることを勧める。Iは「問」の部分である。異見の人が多くの経論を引いて罪障の凡夫は往生できないというのに対してどのような難を対治すべきか。

J、JKLMは「答」である。Jは撰論家等に対するもので、彼らのものと自分のものとは時・機・利益が異なるのであって、自分には『観経』『弥陀経』等は絶対的意味をもつものであるとする。

K、地前の菩薩羅漢辟支仏からの難を対治するもの。

L、地上の菩薩の難に対するもの。

M、化仏報仏による難に対するもの。釈迦の凡夫往生説は虚妄であるとの批難に対し、そのようなことはありえないという。それは一仏は一切仏に通ずるもので、一仏の証果大悲等は他の一切仏のそれと異なるものではないからである。『阿弥陀経』には釈迦の教説の間違いないことが種々説かれている。

「観経疏」散善義 (浄全二ノ五六頁)

A	B	
二者深心言、深心一者、即是深信之心也	亦有二種。一者決深信自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流轉無有出離之縁	
○	○	選択集(第八章)
○	○	三部経大意
○	○	三部経釈
○	△	要義問答(第八)
○	○	大胡太郎実秀につかはす御返事
△	○	浄土宗略抄
△	○	三心義
○	○	往生大要抄
○	○	十二箇条の問答
△	○	御消息
△	△	念仏往生義
△	○	十七条御法語

法然上人の深心釈

服部正穂

序

- 一、疏の内容
- 二、疏からの引用
- 三、法然の深心釈
- 1、四語録対照表
- 2、四語録の補足
- 3、四語録の内容
- 4、四語録以外のもの

序

深心は『観経疏』散善義（浄全二ノ五六頁）及び『往生礼讃』前序（浄全四ノ三五四頁）に説かれている。法然の語録を見ると「浄土宗略要文」のみが『礼讃』からの文のみを引用し、『選択集』「往生大要鈔」は両者を引用し、「三部経大意」（三部経釈）は『観経疏』からの文のみをあげている。他は両者の合作のようである。しかし諸種の法語を考察するとき、『観経疏』が中心になっているように思える。次に『観経疏』のどの部分に法然の関心があったかを表によって見てみたい。その前に『往生礼讃』前序の文をあげておこう。

（これも「深心釈」の重要な資料であるから）

二者^{ニハ} 深心即^チ 是^レ 眞実信心^{ナリ} （本質）

信^シ下知^ル自身^ハ是^レ具足煩惱^ノ凡夫善根

薄少^{ニシテ} 流^ニ転^{シテ} 三界^ニ不^レ出^中火宅^上 （信機）

今^下信^知弥陀^ノ本弘誓願^及称^ニ名号^ニ下至^ニ十声^一声等^ニ定得^中往生^上

乃至^ト一念^ト 無^レ有^ニ疑心^ニ故名^ニ深心^ト （信法）

一、疏の内容

『観経疏』では深心について「就人立信」「就行立信」の二つに分けて論じているが、特にここで関係のあるのは「就人立信」に関する部分である。就行立信に関してはこれが行に関するものであるため法然は別に取り扱っている。（『選択集』第二章参照。「三心義」では「就行立信」にも触れている。昭法全、四五六一四五七頁）。ここでは就人立信に関する文について考えることとする。まず各部分の要点を明らかにしておこう。（以下のA B…はそれに付合する）

A、深心＝深信とは深心の本質を示すものである。